対人関係への過敏な認知行動的反応が反すうに及ぼす影響

○星野 真由・金之 優
（帝京平成大学大学院臨床心理学研究科）

キーワード：対人関係、拒否に対する感受性、重要者への再確認傾向、反すう

問題
自分にとって重要な存在との関わりが精神的健康などに影響を及ぼし、重要者に確認を求め続けると、重要者から拒否反応を受け、関係悪化につながるといったように、再確認傾向は対人関係の悪化、抑うつの発生・持続などの精神的健康に関わる様々な問題との関連が示されている。一方、拒否に対する感受性については、過敏になっていると、かえって対人関係を悪化させてしまい、そのような者は、相手の行動に対し拒否していると知覚しやすく、お互いの関係性に不安をもたらす、敵意や嫉妬を抱いて、相手が自分から離れていくように仕向けてしまうことがあると指摘されている。ところで、うつ状態をもたらす要因としてネガティブなことを繰り返し考え続けること、いわゆるネガティブな反応が挙げられる。本研究では、再確認傾向と拒否に関する感受性といった対人関係への過敏な認知行動的反応が反すうに及ぼす影響を検討することを目的とする。

方法
調査対象者：首都圏の大学生 2～4年生計 193 名
調査時期：2010年11月17日、11月18日、11月25日の3回
調査項目：
1. 改訂版重要者に対する再確認傾向尺度（勝谷, 2004）12項目7件法。再確認頼望、再確認行動の2因子からなる。
2. 日本語版拒否に対する感受性測定尺度（本多・桜井, 2000）18項目6件法。
3. ネガティブな反すう尺度（伊藤・上里, 2001）11項目6件法。本研究では、ネガティブな反すうの因子得点を分析に用いた。
手続き：臨床心理学専攻している学生1クラス、身体機能学専攻している学生2クラスを対象とし、3回の調査を行った。文章と口頭で調査の説明を行い、調査協力者が質問紙に記入したことでこの調査の主旨に同意したものとした。

結果
まず、変数間の相関係数を算出した。再確認傾向と再確認行動は共に、拒否に対する感受性と正の相関を示した（r=.31, r=.35；共にp<.01）。また、再確認傾向と再確認行動は共に、ネガティブな反すうと正の相関を示した（r=.31, r=.48；共にp<.01）。拒否に対する感受性も、ネガティブな反すうと正の相関を示した（r=.42；p<.01）。

次に、ネガティブな反すうを被説明変数、再確認傾向・再確認行動・拒否に対する感受性を説明変数として、重回帰分析を行った。その結果、重決定係数は.30で有意であった（p<.01）。標準偏回帰係数については、再確認行動がβ=.39、拒否に対する感受性がβ=.29といったように、どちらとも正のパスがみられ（共にp<.01）、再確認行動・拒否に対する感受性が強く、反すうが強くなることが示唆された。しかし、再確認傾向からは有意なパスは認められなかった。また、再確認行動と拒否に対する感受性を比較すると、再確認傾向の方が、反すうへの影響性が若干強い様相が見られた。

考察
本調査においては、再確認行動と拒否に対する感受性が、ネガティブな反すうを強める事が示唆された。再確認傾向に関しては、再確認をしたいという願望だけでは必ずしも反すうにはつながらないが、実際に再確認行動を行う事は、その行動の結果についても考えを巡らすことに、反すうにつながることが推測される。また、拒否に対する感受性については、感受性が強いと、拒否を受かった場合の結末や、どのようにしたら拒否されなくて済むかといったこと等を考えたりすることが、反すうにつながると考えられる。対人関係における抑うつの予防するためには、ネガティブな反すうを緩和することが重要であると考えられるが、本調査の結果からは、そのためには、再確認行動と拒否に対する感受性に焦点を当てる必要性が示唆された。

（ほしの まゆ・かねつか まさる）